「けいすけくん、あったかプリン作ったげる」
それは午後四時の『お約束』だった。
午後四時になると必ず、ミキ姉ちゃんはそう言って、僕を台所へ手招きする。隣の和室で絵本を読む僕は、待っていましたとばかりに立ちあがって、ミキ姉ちゃんの傍まで駆け寄る――ミキ姉ちゃんのお手伝いをするために。
団地特有の狭いシステムキッチンに並べられたのは、真っ白な卵、牛乳、砂糖、甘い匂いがする茶色の小瓶。そして、使い込まれたベコベコのアルミボウル、壊れかけた泡だて器、タオルに、大きなマグカップが二個。古い換気扇が常にぶううん、と鳴っているのが、ミキ姉ちゃんの家だった。
「けいすけくん、卵割ってみる？」
卵を手渡され、ボウルの中に割り入れる。気を付けているけれど、卵はきれいに割れず、毎回必ず殻の欠片がボウルに落ちた。しょせん小学一年生のつたなさだ。うまく割れるはずがない。
「フフッ、卵割るのって難しいよね」
難しいと分かっているのに、ミキ姉ちゃんはいつも僕に卵を割らせては、その様子を見て笑う。その度に僕は勝手に傷ついて、すねて見せる。すると、ミキ姉ちゃんは卵白と、やぶれた卵黄と、卵の殻がまとわりついた汚い僕の手を、優しく手拭きタオルで拭いてくれた。手を拭われるその度、ミキ姉ちゃんの手つきを感じる度に、心臓がどきどきしていた。それがばれないように、わざと視線をそらしていたことを思い出す。
ミキ姉ちゃんはボウルの卵をほぐして、砂糖を目分量でざざっと入れる。牛乳はきちんと計量カップで図って、それからボウルに入れていた。
茶色の小瓶の中身を振りかけて（大きくなってから、それが「バニラエッセンス」という香料だと知った）プリン液ができたところで、ミキ姉ちゃんはマグカップに大さじ一の砂糖と小さじ半分の水を入れて、電子レンジに入れた。つまみを回すと、ブウウン、とレンジのかかる音が響く。

「レンジ、見ててね。色がつき始めたら止めてね」
うん、と僕はうなずいて、レンジの前に顔を構える。プリンを作るとき、レンジの守り人は僕の役目だ。ぷつぷつぷつ、と、砂糖が溶けていく音がする。レンジの光で良く見えないけど、もう何回もやっているから、止めるタイミングはすっかり分かっていた。
ぐいっとつまみを元の位置に戻して止めると、チン、と聞き慣れた音がした。レンジからカップを取り出して、ミキ姉ちゃんの前に置く。
「けいすけくん、今からお水入れるから、カップの中をのぞきこんじゃダメよ。やけどしちゃうから」
ミキ姉ちゃんがカップにほんの少し、小さじで水を入れると、バチバチと大きな音がした。こうすることによって、砂糖は茶色いカラメルになって、冷えて固まるのだ。
カップの中にプリン液を注ぎ、またレンジに入れる。
「泡がぷくぷくして来たらすぐ出してね」
再び僕はレンジの守り人だ。じーっとレンジの中身を監視する。ここでレンジをかけっぱなしにすると、美味しいプリンは作れない。今思えば、プリン一つに大層な責任を負っていたのだな、と笑い話の一つにでもなるのだけれど、当時の僕にとっては重要な事だったのだ。ミキ姉ちゃんに頼られてるって感じがしていたから。
じっと見ていると、カップからぷくりと泡が出てきた……今だ！　素早く扉を開けて、タオルを持って待っているミキ姉ちゃんの前に、マグカップを持っていく。すると、ミキ姉ちゃんが素早くタオルでマグカップを包んだ。
「これでしばらく待とうね」
あったかプリンができあがるのは、マグカップが冷めた頃。ふるふるで温かな、美味しいプリンができあがる。

→→→つづきは
《おねショタ》アンソロジー『∞-infinity-』で！